



海外部主任
林佐紀さん

Saki Hayashi

●海外部主任としてアフリカ事業を担当。1968年創業の同社は、熱可塑性樹脂の射出成形をはじめ、90年代後半からは太陽電池を利用した電源システムの開発を開始。現在では自発光道路標識や自発光タイルの製造開発を行う。

「滋賀県東近江市」 辻プラスチック株式会社

海外進出をサポートする
JICAの民間連携事業

田丸一男(以下、田丸) 御社は2017年にJICAの民間連携事業に採択され、タンザニアで「自発光道路標識(びょう)」を活用した夜間の交通安全対策にかかる案件化調査」を実施されました。具体的な調査内容をお聞かせください。

林佐紀(以下、林) 道路標識は道路のセンターラインや交差点などに埋め込み、電灯や反射材の発光で境界線を表示し、安全走行を促すものです。現地では太陽光で充電する自発光式

海外進出をサポートする JICAの民間連携事業

田丸 2016年8月にケニアで開催されたTICADV(第6回アフリカ開発会議)で、国交省の依頼により弊社取締役が道路標識による安全対策をプレゼンテーションしました。すると、日本のゼネコンの方々から「道路建設の増加に伴う事故も多いタンザニアに進出したらどうか」と勧められました。しかも、海外進出の経験も

林 2016年8月にケニアで開催されたTICADV(第6回アフリカ開発会議)で、国交省の依頼により弊社取締役が道路標識による安全対策をプレゼンテーションしました。すると、日本のゼネコンの方々から「道路建設の増加に伴う事故も多いタンザニアに進出したらどうか」と勧められました。しかも、海外進出の経験も

途上国SDGsビジネスが、 企業を成長させるチャンスに！ アフリカの未来を築く多彩な民間連携事業

SDGsに関心が集まるいま、これをビジネスチャンスとして捉え、途上国の課題解決に挑む企業が増えている。JICAの民間連携事業をフルに活用し、アフリカで太陽光ビジネスを展開する辻プラスチックを取材した。



道路標識で
夜道を照らす

タンザニアでは、自社製の自発光型道路標識が設置された。

「PARTNER」は海外志向の 企業と人材との出会いの場

田丸 その後、辻プラスチックへ入社されますが、そのきっかけもJICAのサービスだったとか。

林 「PARTNER」という、JICAが運営する国際キャリアの総合情報サイトがあります。そこでは青年海外協力隊など、海外での活動経験のある人や海外で活躍したいと考えている人と、そうした人材を求めている企業や団体をマッチングする機能があり、弊社も求人を出しています。



留学生へ
日本の技術を

2~4ヶ月間の研修期間中は、帰国後に現地パートナーとなってもらうためあらゆることを学んでもらう。

留学生を積極的に受け入れ やがては現地パートナーへ

田丸 所属する海外部では、どんな業務を担当されているのですか。

林 渡航の段取りや現地での調整など、アフリカ事業に関する全般です。また、これもJICAの支援事業のひとつに、「ABEイニシアティブ」という、アフリカの若者を日本に招き、日本の大学での修士号取得と日本企業などでのインターンシップの機会を提供するプログラムがあります。弊社では18年からのこのプログラムを

フリーアナウンサー 田丸一男さん



Kazuo Tamaru

●大学卒業後、NHK入局。報道取材やニュースキャスター、高校野球などのスポーツ実況を担当し好評を博す。91年に毎日放送へ転職し、ドキュメンタリーから情報番組まで幅広く担当。現在はフリーアナウンサーとして活躍中。

田丸 通常の求人サイトでは、なかなか出会えない応募条件ですね。

林 登録者の大半が海外で活躍したい人ですので、企業側からするとそういう人材を探しやすいサイトかと思っています。

田丸 応募条件に「ひとりですアフリカ出張ができる人」とあり、またアフリカへ行くのは「帰国後、弊社のリカへ行くのはと応募しました。

林 通常の求人サイトでは、なかなか出会えない応募条件ですね。

田丸 登録者の大半が海外で活躍したい人ですので、企業側からするとそういう人材を探しやすいサイトかと思っています。

田丸 3年間ですでに14ヶ国20名ほどの留学生を受け入れられています。が、実際に現地でのビジネスに繋がった例はあるのですか。

林 いま、アフリカではスマートフォンが爆発的に普及していて、電気が通っていない地域では充電サービスが盛んです。弊社は流通している充電器よりも安価で壊れにくい、バッテリーのないソーラー充電器を開発し、ニジェール出身の元留学生をビジネスパートナーに、充電器のレンタルサービスを展開しています。

田丸 アフリカでは、ソーラー充電器が活用されそうですね。

林 充電器のシステムを活用して開発したソーラーポンプは、留学生の「農業用水の確保に困っている」という声から生まれた製品です。現地

ではガソリンで動くモーターで水を汲み上げていましたが、費用の問題から使えなくなるのは1日2時間。しかし、弊社のソーラーポンプ導入後は、お金を気にせず使えると好評です。現在、ニジェールとセネガルで実証実験中ですが、近い将来にビジネス展開していきたいと思っています。

田丸 「案件化調査」に「PARTNER」と、御社はJICAのソリューションに活用され、着実にアフリカにビジネスの種をまいているのですね。今後の展開を楽しみにしています。本日は貴重なお話をありがとうございました。

下記二次元コードを読みとると
JICA民間連携事業の
他の事例もお読みいただけます



海外協力隊
当時の活動

現地の文化に触れ「所有することが幸せではない」と価値観が変わりました」と林さん。